別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　　篠原　亜佐美

論　文　題　目

「評価する」・「評価される」の発達：
協力社会におけるゴシップの役割に着目して

論文審査担当者

主　査　　名古屋大学教授　川合　伸幸

委　員　　名古屋大学教授　三輪　和久

委　員　　名古屋大学准教授　石井　敬子

委　員　　名古屋大学客員准教授　小林　哲生

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

本論文は、「情けは人のためならず」という諺に端的に表現される間接互恵性が、いつ頃からどのように発達するかを解明しようとした実験的研究である。ヒトの社会では、親切にされた人には親切にするという互恵性だけでなく、ある人が他の人に親切にしているのを別の人が見ると、その親切にしていた人に親切にするという間接互恵性がみられる。間接互恵性には、他者の行動を第三者視点で評価し、他者に協力するかどうかを決定する「他者行動の評価」（社会的評価）と、第三者からの評価を気にして自身の協力行動を調整する「他者からの評価」（評判操作）の２つが重要であると指摘されてきたが、ヒトの協力社会の基盤となるこれらの行動はいつ頃からどのように発達するかは不明であった。そこで本研究は、4 歳から 8 歳の子どもを対象とした 8 つの実験で、その発達過程を検討している。

第 1 章では、ヒト成人が実際に社会的評価や評判操作をおこなうことを示した研究を紹介し、ヒト乳幼児を対象とした社会的評価や評判操作の発達を調べた研究を概観し、「いま・ここ」にいない人の評価と自身の評判操作の研究の重要性を指摘している。

第 2 章では、「自分が資源を分配する相手が良い人か悪い人か」を観察者が知っているかどうかを操作することで、6-8 歳児が観察者からの評価を気にした分配行動をみせるかを検討した。その結果、自分が分配しようとする相手が良い人か悪い人を、第三者である観察者が知っているときと知らないときで分配行動が異なったことから、6-8 歳児は観察者が自分をどう評価するかを考慮したうえで、協力行動を調整していることが示唆された。

第 3 章と第 4 章では、他者からの情報（以降「ゴシップ」）を基にした社会的評価の発達を検討している。第 3 章では、ゴシップに基づく社会的評価は 5 歳から 7 歳の間に顕在化するが、ポジティブなゴシップよりネガティブなゴシップに基づく社会的評価のほうが早く発達することを明らかにした。第 4 章では、7-8 歳児は複数人からポジティブなゴシップを聞いた後にはその人を好意的に評価するが、1 人から複数回ポジティブなゴシップを聞いた後にはそのような評価をしないことを明らかにし、様々な人からゴシップを聞くことが重要であることが示唆された。

第 5 章では、8 歳児は自分の行動が他人にゴシップされる可能性のあるときには、より多くの資源を分配したが、4 歳児はそうしないことを明らかにし、ゴシップを気にした評判操作は 4 歳以降の 8 歳頃までに出現することが示唆された。

第 6 章では、7-8 歳児はネガティブなゴシップの提供者を協力的なパートナーとして選択せずまたその提供者に多くの資源を分配しないことを示した。このことから、7-8 歳児はネガティブなゴシップの提供者のことを「悪い人」と評価している可能性が示唆された。

第 7 章ではこれまでの一連の研究結果をまとめ、ゴシップを基にした社会的評価、ゴシップを気にした評判操作の発達について議論している。

本研究は、ゴシップという観点から間接互恵性の発達過程を明らかにしたことが特に評価できる。審査委員会からは本研究での実験で用いた課題間の関連や反応のコストの問題に関する質問等がなされたが、これらに対して関連する研究や自身の見解を述べて、適切に回答した。

以上のように、本研究は間接互恵性の発達過程を明らかにしたという点で、認知科学や発達心理学の発展に大きく貢献した。よって本論文の提出者篠原亜佐美君は博士（学術）の学位を授与される資格があるものと判定した。